女性参政権は悪魔の誘惑⁉

奪われた権利と「物言う女」への恐れと嫌悪

羽澄　直子

１．はじめに～セネカ・フォールズの権利会議

アメリカの女性参政権獲得運動推進の口火をきったとされるのは、1848 年 7 月にニューヨーク州セネカ・フォールズで開催された女性の権利会議である。ルクレチア・モット、エリザベス・ケイティ・スタントンとその友人たちが企画したこの会議では、アメリカ独立宣言を模した「女性の権利に関する意見宣言」が出された。

> We hold these truths to be self-evident: that all men and women are created equal; that they are endowed by their Creator with certain inalienable rights; that among these are life, liberty, and the pursuit of happiness; that to secure these rights governments are instituted, deriving their just powers from the consent of the governed. (“Declaration of Sentiments and Resolutions”)

モットやスタントンが女性の権利を意識するきっかけとなったのは、夫とともに関わっていた奴隷制廃止運動であった。19 世紀初頭に貧困層への福祉、禁酒運動、衛生改革など、社会改革活動への関心を深めた女性たちは、道徳的観点から奴隷制廃止運動に賛同することも少なくなかった。しかし女性たちは既成の男性の活動組織からはほぼ排除され、彼女たちは自分たちも奴隷と同じように不平等な立場に置かれ、様々な権利を認められていない現実をつきつけられていた。セネカ・フォールズの宣言において、女性たちは自分たちが本来人間として持つはずでありながら、男性によって剥奪された公的権利の奪還を求めたのであるが、なかでも参政権は「譲り渡すことのできない、一番大切な市民の権利」であると位置づけられ、以後アメリカの女性参政権獲得運動は活発化する。

参政権とは社会に自分の意見を反映させ、公の意思決定に関わるものであり、社会改革運動を推進するためにも不可欠な権利であった。選挙を含めた政治的行動を通して制度や法律を改正することにより、正しいと思うことを実現させたり現状を改善したりすることが可能になるからだ。しかし参政権を持たない女性には、自分たちの代表を選ぶことや直接立案に関わることはできず、地道に集会を開くなどして男性を感化して間接的に社会を動かし、改革の実現にこぎつけるより他はなかった。禁酒運動の際に女性の団体が酒屋の前で讃美歌を歌い続けて店に対して営業妨害をすることがあったが、これは法的手段を持たないからこその過激な行動であった。また法による権利を持たない女性は、男性の庇護や援助がなければ社会的には無力な存在に陥りがちであった。

２．南北戦争後の憲法修正と女性参政権獲得運動

南北戦争が終わり、憲法修正第 14 条（1868）、15 条（1870）で、元奴隷のアフリカ系の男性には参政権への道が開かれたにもかかわらず、事実上女性の参政権が保障されなかったことを受け、女性参政権獲得運動は本格化する。1869 年には 2 つの参政権協会が発足する。1 つはスタントン、スーザン・B・アンソニーたちが設立した全国女性参政権協会（National Woman Suffrage Association [NWSA]）。会員は女性限定で連邦憲法の修正を求めた。もう 1 つはアメリカ女性参政権協会 (American Woman Suffrage Association [AWSA])で、男性会員も認めており、まずは州憲法の修正を求めるという NWSA に比べるとやや穏健な組織だった。この 2 つの組織は 1890 年に合併し、全米女性参政権協会　(National American Woman Suffrage Association)となる。

女性参政権に対する連邦憲法の壁は厚かったが、それでも組織化して力をつけた運動の成果は徐々に現れた。町、市、郡や州レベルの参政権は、投票権に限定されることもあったが少しずつ認められるようになった。19 世紀末までにはワイオミング準州、ユタ、コロラド、アイダホ州が女性の参政権を容認し、特にユタ州では 1896 年に女性の完全な参政権が認められた。大都市を抱える州で初めて女性参政権を認めたのは、1910 年のワシントン州であった。

作家のルイザ・メイ・オルコットの住むマサチューセッツ州コンコードは、1879 年に初めて女性が条件付きで選挙人登録をすることを承認した。オルコットは、コンコードで初めて選挙人登録をした女性の 1 人であった。登録には前年度に納税したことを示す書類が必要とされた。オルコットたちの初めての投票は 1880 年

で、20 人の女性がタウンミーティングに出席し、教育委員会に関する投票をおこない、コミュニティにおける重要な意思決定に携わったのである。

３．女性参政権獲得運動への反発

女性参政権獲得運動が進むにつれ批判や反発も激しくなる。選挙へ行こうとする女性への社会的圧力は強かった。オルコットは女性参政権専門誌『ウーマンズ・ジャーナル』に寄せたレポートに、自分の投票について「氷は砕けた」と書き女性参政権の進展への手ごたえを記す一方、コンコードで選挙人登録の資格のある女性納税者 100 人のうち、当初は 7 人しか登録しなかったことへのいらだちをあらわにする（160-163）。

女性参政権に対する嫌悪の強さは、女性が権利を手に入れ発言権を強めることに対して男性社会が抱く恐怖の裏返しが要因の一つであろうか。女性の権利獲得＝男性の既得権を脅かすとの図式が浮かび上がる。女性のなかにも自分たちは表に出ず男性を導いてよい影響を与える方が良いと考え、参政権に消極的な者もいたが、反発の多くは男性からであった。女性の参政権の現実化が進むなか、それを阻止する合理的理由を提示すべく、医学的見地、科学的見地から女性の社会進出を否定する発言が飛び出してくる。例えば 1870 年代にはあるハーバード大学の医者が、女性が大学で勉強をすると、脳が大きくなる代わりに子宮が縮んで将来出産ができなくなると警告している（Wayne 84）。このような権威ある男性の意見は長らく女性たちを悩ませた。女子大のなかには、スポーツや健康教育に力を入れて、高等教育が女性の生殖と健康を損なうという説を払拭しようとするところもあった。

反女性参政権の言説の中心となったのは、参政権を求めて活動する女性たちは、女性があるべき領域を逸脱し、敬虔で美徳あふれる「家庭の天使」「真の女性」たる他の女性を悪の道に引き入れる悪魔として弾圧するものだった。セネカ・フォールズの宣言から 40 年近く経過した 1880 年代になっても女性参政権を拒む根拠は相変わらず「女性の領域は家庭である」という規範であった。女性参政権を主張する女性を醜く描いて揶揄する風刺画はこの規範を最大限に利用したものといえるだろう。

新聞や雑誌の記事やパンフレットは女性参政権攻撃の格好の道具であった。文学の世界では「反フェミニズム小説」が一定の人気を得て、社会規範を破る女性にはどのような災いが降りかかるかを読者に訴えかけた。なかでも異彩を放つのがアメリカよりも女性参政権運動が過激だったイギリスで出版されたウォルター・ベサントの *The Revolt of Man* (1882)であろう。男女の役割が完全に入れ替わる 22 世紀が舞台で、最終的には男性が主導権を奪還して「正しい」社会を立て直す物語である。フェミニストによる恐怖政治を描き女性が権力を持つ危険性と不当性を示すことが狙いであったと思われるが、小説のなかで男性が置かれる従属的な状況は、まさに現実の女性の姿であった。自らが描いた世界が現実社会の男性の暴挙をはからずもさらけだしていることに、ベサントは気がつかなかったのだろうか。

４．おわりに～女性参政権の完全実現

1920 年の憲法修正第 19 条の批准により、アメリカの女性参政権は完全実施を勝ち取った。現実には 100 年たった今もなお社会進出を目指す女性へのガラスの天井は存在し、マイノリティの政治的権利は保証されているとはいい難い。またアメリカの女性参政権獲得運動については、一部の白人特権階級の活動であり貧困層や人種的マイノリティの声を軽視してきたという一面も否定できない。それでも参政権という法的な裏付けを得た強みが社会的弱者に力を与え、女性の在り方を多様化させたことは事実であり、運動の価値は減じられるものではないと思われる。

引用文献

Alcott, Louisa May. “Letters from Louisa May Alcott.” *Louisa May Alcott: From Blood & Thunder to Hearth & Home*, edited by Madeleine B. Stern, Northeastern University Press, 1998, pp. 160-163.

Besant, Walter. *The Revolt of Man & The Case of Mr. Lucraft.*1882. The Eco Library, 2007.

“Declaration of Sentiments and Resolutions.” National Women’s History Museum https://www.womenshistory.org/resources/primary-source/declaration-sentiments-and-resolution

Wayne, Tiffany K. *Women’s Roles in Nineteenth-Century America.* Greenwood P, 2007.